

こどもと後天性脳損傷(ABI)

こどもと大人の脳損傷が最も大きく異なるのは、こどもの脳は発達段階にあるということです。

こどもの場合に、脳や神経経路のある範囲が壊れると、特定の機能や能力の発達が止まったり遅れたりすることになるでしょう。幼いこどもの脳へのダメージは特定の機能障害を生じるというよりは、全体的な能力の発達に影響を及ぼすことが多いでしょう。以前に獲得した技能は脳が相当な損傷を受けると失われます。こどもがどこまで発達するのは著しい違いがあり、こどもは一人一人が違って当たり前なのだとすることを忘れてはなりません。

長期の結果

事故の後の最初の評価では、長期の予測がなかなか難しいのですが、これには次のような理由があります。まず身体的、心理的な回復が時間とともに大幅に期待できるということがひとつの理由です。もうひとつは、特定の障害部位は、こどもが一定の発達段階に到達して初めてはっきりしてくることがあるからです。脳損傷のこどもは各発達段階で、多くの機能の分野において同年のこどもたちから遅れるでしょう。集中的なりハビリがあれば違うかもしれませんが。そういったリハビリや特別教育支援が、発達の遅れた部分に対して必要になります。こどもの脳損傷の最も一般的な長期的影響は、次のような領域に分類できます。

感覚と運動

こどもは以前に獲得した技能の一部を失うかもしれません。あるいは、新しい技能の獲得が難しいでしょう。それらには次のようなものがあります：ペンを持つこと、絵を描くこと、コンピュータのキーボードを打つこと、ものを作ったり扱ったりすること、フォークや箸をつかうこと、服を着ること、ものを認識すること、その他さまざまな目と手の共同運動に関すること。そのほかの問題として、平衡感覚、共同運動、嚙下、発話などがあります。理学療法士（PT）、作業療法士（OT）、言語療法士（ST）などの専門家による感覚や運動の障害に対する評価とリハビリが大切な役割をはたします。

認知

重症の脳損傷は、多くの知的能力において全体的な低下を起こすでしょう。しかし、大人でもあるように、こどもにおいても、知的能力の検査では正常範囲ですが、注意、記憶、言語、視覚空間、遂行といった特定の機能に著しい問題をもつことがあります。こういった障害は、

こどもの学校に関連した知識や活動の発達に影響するでしょう。

言語と意思疎通

読み書きや口頭での会話のために必要な技能は、言語、知覚、理解、表現に分けることができます。多くのこどもが、知覚に問題があります。つまり、会話や文字情報の部分部分を処理することができないのです。理解ができないというのは、読んだり、他の人が言ったりすることがわからないということです。発話や文字による表現も発音、流暢さ、文法、わかりやすさ、意味、語彙選択などにおいて問題が起こります。

人間関係、行動、感情

こどもは、仲間や兄弟との関係で難しい面が出たり、グループ活動に参加することが難しいでしょう。彼等は親や先生の注意をとて引きたがり、ルールや指示に従うのが難しいのです。脳損傷の後に起こってくる行動障害には、次のようなものがあります。憂うつなあるいは不安な気分、多動、気が散りやすい、衝動的、軽率な判断、怒りや欲求不満に対する抑制欠如、気分変動、攻撃、睡眠障害、意欲や発動性の低下などです。回復の早い段階で、人間関係や行動、情緒面の問題がわかったときには、学校や家庭においてさまざまなリハビリテーションの方策が取られるでしょう。

回復における年齢の影響

損傷時の年齢と長期の回復の程度との関係についてはまだよくわかっていません。年齢が低いほど、「神経の可塑性」によって、より多く回復するという説や、損傷された機能を発育中の脳は認識して、代わって機能しうるからという説があります。しかし、こういった説を支持する根拠はまだ少ないのです。

一般的にいえば、より幼いときの損傷は、さまざまな領域においてより低い機能の回復や結果をもたらすでしょう。このような知見は、次のような見解を支持しています。つまり基本的な機能をする力が脳損傷以前に発達しているほうが、長期的な結果は良いというものです。こどもの年齢が回復に与える影響は他の要因に比べるとさほど重要でないことが示されています。他の要因というのは、つまり、脳損傷の重症度や種類、こどもの損傷以前の技能や経験、家族の能力、家庭や学校におけるリハビリテーションや支援などです。

(クイーンズランド脳損傷協会 ファクトシートより許可を得て翻訳転載)